

白井舒久先生の人と業績について —寝屋川市立あかつき・ひばり園における軌跡—

林田 弓夫

この度、白井舒久先生が名誉教授になられ、その記念号としての紀要への執筆依頼を賜り、誠に光栄に存じます。(以下、「白井先生」と呼ばせて頂きます)

私は、白井先生が寝屋川市の職員として活躍されたうちの約25年間、先生の下で障害児療育の仕事に携わり、多くの事を学ばせて頂きました。多くの方々に慕われておられる白井先生のお人柄やその業績を、どれほど鮮明にできるかわかりませんが、拙い記憶をたどりながらですが、述べさせて頂きたいと思います。

寝屋川市立あかつき・ひばり園の開設

寝屋川市は、大阪府の東北部・淀川左岸にあり、京都と大阪の中間に位置する人口約25万人の中堅都市です。

1951(昭和26)年の市制施行当時の、のどかな田園都市が、高度経済成長期に、大阪市の衛星都市として人口が急増し、1960(昭和35)年からの10年間に人口が4万5千人から20万6千人と約4倍に膨れ、人口密度が1万人を超える都市に成長してきました。

(注1)

その寝屋川の地に、1973(昭和48)年5月1日、障害児の親や関係者が待望した、就学前障害児通園施設「市立あかつき・ひばり園」(以下「園」)が開設されました。

あかつき園は肢体不自由児を対象として定員40名、ひばり園は知的障害児(当時は「精神薄弱児」)を対象に、同じく定員40名の施設で、この異なる二つの施設を同一敷地内に併設し、さらにそれを統一的に運営するという形は、全国的に例を見ない画期的なものでした。

入職早々、園のとりくみの中心的役割を担う

園の開設から1年後の1974(昭和49)年4月1日、白井先生をはじめ、理学療法士を含む5名の新しい職員が採用されました。大学を卒業したばかりか、または卒業後1~2年の職員で、私も、その中の1人で

した。

採用の辞令交付を受けたその日、この新しい施設づくりを託されていた細川順正氏(当時は主幹、のち園長、その後、大分大学教授)から、新入職員全員が残るように指示が出され、夜を徹しての「園の目標」づくりの作業となりました。

開設2年目を迎えた園には、まだ目標もできておらず、ほとんど素人集団での手探りの1年を経て、園の基礎作りを託す期待を背負っての我々新人採用であったのかもしれませんが。

しかし、正直、まだ何もわからず、議論と言っても、何も言えない私たちの中で、少し年長でもあり、大学院で教育学を修められた異色な存在である白井先生は、その作業を進める中心的役割を担われることになりました。

この時に作成された園の目標は今も変わりにくく引き継がれております。

この日の出来事は、その後、園のとりくみが白井先生の存在に大きく依存していくことを示唆していたと言えるでしょう。

研究室による事業年報の発行

それは、早速、新たに組織された「研究室」の活動に現れました。この研究室の役割は、後に私たちが「研究しない研究室」と呼んでいた様に、毎年の園の実践を事業年報として残すことと職員研修の企画・組織化でした。メンバーは白井先生を含む指導員6名で、事業年報『歩き続けよう』第1号の作成作業にとりかかりました。開設した前年度の園のとりくみを事業年報として編集し発行するもので、障害児への指導が全く未経験とも言える職員達が残した、記録とはいえない資料を基に、徹夜と休日返上でまとめていく作業となりました。力量不足で原稿一つできず、後ろ向きになりがちな私たちを、白井先生は責めることもなく、持ち前の明るさで励まし、大変な作業を中心的にすすめられ、私たちを引っ張ってくれました。今思えば、こ

の時すでに白井先生の教育者・組織者としての本領が発揮されはじめていたのだと思います。

五者協議会と幼児教室の開設

この年、寝屋川市では、五者協議会が発足しました。五者協議会は、①大阪府中央児童相談所、②大阪府寝屋川保健所、③市児童課、④市家庭児童相談室、⑤あかつき・ひばり園、の五者で構成されています。

この協議会は、寝屋川市における障害児全体の福祉を考える常設の協議機関として生まれたもので、発足を促す背景には、50名を超えるとされていた園の待機児童への対策や、親たちの幼児教室開設の市に対する要請がありました。

幼児教室の開設は、それまで保健所で障害児とその保護者に対して、子どもの発達援助と保護者指導を目的とした指導が行われていたものを母体として、市立児童会館の一室を使用して、五者の各機関から1名ずつ（あかつき・ひばり園は2名）出張で参加する形態ではじめたものです。各分野の専門性を生かしながら指導にあたり、また、府と市の機関が共同で一つの事業を行う上でも、画期的なものでありました。その後、幼児教室は、愛称を「どんぐり教室」と呼ぶことになりました。^(注2)

この時、幼児教室（どんぐり教室）への派遣の任務に充てられたのが白井先生でした。

もう1人の保母と週2日、教材を持って児童会館へ保育に赴くとともに、5つの機関の調整役も果たされました。ともすればバラバラになりがちな行政組織のスタッフを公私ともにまとめ上げられ、単なる形式的結びつきではなく、互いに信頼の上に築かれた事業にまで高められたのは、正に白井先生の人間性に負う所が大であり、真に要としての役割を果たしておられました。余談になりますが、当時は園内においても他の職員にどんぐり教室の意義が十分に理解されておらず、週2回抜けていくことに対する疑問も出る中、園での療育実践とのかけ持ちで、どれほど労苦を重ねられたことかと思われまます。

しかし、この時に築かれた他機関のスタッフとの信頼関係が、後の市の障害児療育ネットワーク作りに大きく貢献していくことになりました。ちなみに、五者協議会では、さらに、一歩進んで在宅重度障害児の問題に取り組む計画の検討に入っていました。

第2ひばり園の開設、そして歯科診療所、療育相談室（外来機能）の開設

五者協議会による待機児対策は1980（昭和55）年7月1日の第2ひばり園（定員40名）の開設に実を結び、低年齢児（2才児以下）及び重度重複児の療育保障が本格的にスタートしました。これに先立つ6月1日に白井先生はあかつき・ひばり園主査兼第2ひばり園長に任命され、新たに園の運営を担うこととなります。

市において、児童指導員から、こうした役付きとなったのは白井先生がはじめてで、私たち指導員の将来の道を切り開く先鞭をつけていただいたといえます。

この時期、園は大きくはばたき、新しい施設づくりにはいって行くのですが、それは同時に白井先生にとっては激務を伴うものとなりました。

翌1981（昭和56）年6月には「あかつき・ひばり歯科診療所」、12月に「あかつき・ひばり療育相談室」の開設という画期的なとりくみが始まります。

あかつき・ひばり歯科診療所は、障害児施設内に併設された障害児歯科診療を行う場として、他に類を見ないものでした。寝屋川市歯科医師会の全面的な協力のもと、多くの障害児が抱えていた口腔内の問題を、単なる虫歯の治療といったものではなく、厳密な歯科検診に基づきながら、療育実践と結びついた、療育の一環としての歯科診療を実施し、しかも障害児が地域で安心して診てもらえる障害児地域歯科医療の発展に道を開くものでした。

白井先生は、歯科医師会の先生方とその開設準備にまい進され、開設後も歯科医師会と園の深い絆を構築されていきます。園の言語訓練士などの療育スタッフも参加して、歯科医師会との共同研究を進め、毎年開催される日本障害者歯科学会への研究発表、歯科診療所開設10年を記念しての冊子『障害児歯科診療－10年のあゆみ－』の発行など、その後も地道なとりくみを重ねていかれました。

そして、1998（平成10）年10月1日に、ついに18才以上の障害者を対象とした寝屋川市障害者歯科診療所が市の保健福祉センター内に開設される運びとなりました。

この歯科診療所は、地域の歯科診療所の2次医療機関として位置付けられるもので、こうして市に於ける障害乳幼児から成人に至る障害児者が安心して歯科診療を受けられる体制が整うことになりました。

これは、拠点としてのあかつき・ひばり歯科診療所

の存在と、そこでの多くの実践があってこそ実現出来たものであり、これにより、寝屋川市における障害者地域歯科医療は飛躍的に充実することになりました。

一方、「あかつき・ひばり療育相談室」の開設は、それまでの市立保育所に措置された障害児のみを対象とした巡回発達相談・発達診断に加え、市内の就学前障害児に対し、発達相談・発達診断・栄養相談・機能訓練等を外来機能により対応するもので、園は名実ともに障害児療育の中心的役割を果たせるようになりました。

すばる・北斗福祉作業所の開設

これまで、園は多くの障害児を地域の小学校や養護学校（現在の支援学校）へ送り出してきましたが、養護学校高等部を卒業した後の働く場としての受け皿がありませんでした。その必要性に応え、市は1986（昭和61）年4月1日に障害者通所授産施設「寝屋川市立すばる・北斗福祉作業所」を開設するに至ります。この時、すばる・北斗福祉作業所の円滑なスタートを促すため、職員体制の弱体化を覚悟しながら、園の多くの療育スタッフをすばる・北斗福祉作業所へ送り出されています。

園の大規模改修の実施

開設以来20年を経て、園の建物も老朽化し、雨漏り、空調機の故障など不具合が続出していました。この間、大阪府に大規模修繕補助金獲得の要望を出し続け、ようやくそれが実現することとなった矢先に、湾岸戦争と鹿児島島の自然災害が重なり、各省庁の金庫が空になる事態から取り下げの連絡が入り、白井先生は悔し涙を流されました。

しかし、上司である大西正禮氏（当時療育・自立センター所長、のち寝屋川市理事）の助力により、実現の運びとなり、1993（平成5）年にあかつき・ひばり園の大規模改修が行われました。近くの市立小学校の空き教室を借りて仮教室とすることができるなど、経費の節減と療育の継続を実現しました。

阪神大震災

1995（平成7）年1月6日の早朝、突如起こった阪神大震災では、ご自宅が被災されたにもかかわらず、大阪愛護協会（現在は福祉協会と改称）が進める被災施設への支援において、前述のセンター所長の指示の

もと、芦屋市の障害児入所施設への職員応援派遣、そして同施設園児の金剛コロニーへの緊急避難における移送を園のバスを使用して行うなど、協会役員から「公立の施設が動いた！」と驚きの声がかかるような迅速な対応をされました。それまで、愛護協会をはじめ、他施設との深い信頼関係を築き、また、センター所長からの信頼も厚かった故に実行できたことでした。

職員の育成、専門性の確立、親への支援

白井先生は常に療育に携わる私たち職員に高い専門性が必要であることを述べられていました。自分たちの実践を大切に、そこに科学的な視点をあて、先達の研究成果や教を学び生かしていくことでした。

実際には各種研修への参加、毎年職員が自らの1年間の実践をまとめ、発表し合う園内学会や事業年報の発行、そして自主的な研究会として「エミール研究会」の立ち上げがあります。1982（昭和57）年、白井先生の呼びかけで園の職員有志で始まった同研究会は会を重ね、育った職員により5冊の実践報告冊子^(注3)として発刊されるにいたっています。

また、職員のみでなく、保護者を育て支援することにも努力を重ねられてきました。

その一つに、「保護者会会長OB会」があります。これは、園の現役の保護者会役員と保護者会会長OBとの懇談会を組織したもので、様々な悩みや課題をかかえる親同士が話し合い、OBからのアドバイスも受けることにより、親同士が共に元気づけられるものでした。

常に困難に直面しがちな保護者会活動への大きな支援となるものでした。

終わりに

思い起こせば、数え切れない出来事がありました。その中でも、特に主だったものを取り上げさせて頂きましたが、これらの様々な取り組みは、いずれもあかつき・ひばり園を出発点とし、その基礎の上に立った障害児者療育の実践であり、ネットワークの構築です。

これは寝屋川市の宝といえるもので、そこに果たされた白井先生の働きは驚きに値するものです。

さらに付け加えるなら、これらを実現するためには行政における高い実務能力を抜きには考えられません。その点に於いても、常に大変な努力を重ねられて

きました。

私は白井先生の人と業績の軌跡をたどっていく時、その根底に脈々と教育者の血が流れ、医療を巻き込みながら、教育と福祉の統一がなされていることに気付かざるを得ないのです。

白井先生は、その後、1999（平成11）年10月に保健福祉部参事兼障害福祉課長の辞令により異動され、市の障害福祉課において活躍され、2001（平成13）年9月にご家庭の事情により寝屋川市役所を退職されました。

私は白井先生と多くの時間をともに働かせて頂き、沢山の教えを頂いたことにあらためて感謝し、これからのご活躍を祈念して筆をおかせて頂くことといたします。

（はやしだ ゆみお

社会福祉法人すばる・北斗理事

寝屋川市立すばる・北斗福祉作業所副管理者)

参考資料

（注1）『第四次寝屋川市総合計画』（発行寝屋川市 2001.3）

（注2）『歩きつづけよう 第2号（昭和49年度事業年報）』（発行：寝屋川市立あかつき園・ひばり園）

（注3）『実践研究論集 1～5』（発行：寝屋川エミール研究会 2008）

あかつき・ひばり園 創設から28年

—白井先生のあゆみ—

年号	あゆみ	年号	あゆみ
1973年	寝屋川市立あかつき園・ひばり園開設	1991年	寝屋川市立療育・自立センター療育課主幹兼市立ひばり園長
1974年	寝屋川市立あかつき・ひばり園児童指導員 どんぐり教室開設（週2回；市立児童会館）	1992年	寝屋川市立療育・自立センター療育課長代理兼市立ひばり園長
1975年	園内学会開始	1993年	大規模改修（三井小学校へ引っ越し）
1980年	あかつき・ひばり園主査兼市立第2ひばり園長 寝屋川市立第2ひばり園開設	1994年	阪神大震災-被災地障害児施設に職員派遣
1981年	あかつき・ひばり歯科診療所開設 あかつき・ひばり療育相談室開設 寝屋川市立あかつき・ひばり療育センター主査	1996年	保健福祉部療育課長兼市立あかつき園長
1984年	日本障害者歯科学会（千葉；以後、毎年報告）	1997年	障害児者地域療育等支援事業開始
1986年	すばる・北斗福祉作業所、すばる・北斗自立相談室開設 寝屋川市立療育・自立センター療育課係長兼市立ひばり園長	1999年	保健福祉部参事兼障害福祉課長
		2001年	園研修にて白井先生退職記念講義 寝屋川市役所退職